

Title	M・T・ウアメル著 古典賃銀学説の発展
Sub Title	
Author	三邊, 清一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1942
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.36, No.4 (1942. 4) ,p.355(85)- 360(90)
JaLC DOI	10.14991/001.19420401-0085
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19420401-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論、年ニ兩三度ツ、讀聞セ、常々掌ニ能覺させ、法外之筋堅相慎セ可申候、殊更男子之分幼少之時々能聞覺させ、理非善惡之辨能先祖之御高恩傳へ候様、本家方正月節會出席懈怠爲致申間敷候事、并ニ家法定式五冊、ケ條之趣ハ我カ家之學文、且先祖親々江生前之對面ト存、無等閑折々眞讀致、其意味深相考會得仕、掌ニ自知致、先祖代々之御心ニ相叶候様、平生諸事失念間違無之様、再應心學可仕候、尤ケ條ニ相洩候類在之候ハ、右之意味ニ准シ、連家・別家中無遠慮書加へ可被申候事、附リ元祖之御主人法名釋惠林居士十一月十四日正當御忌日ニテ、業祖爲冥加、家名講と名附ケ、毎年十一月上旬ノ中旬迄之内、日限勝手次第、兩本家ニおゐて夜分家族之衆中會合致、右家法定式五冊之趣眞讀致、承知可仕候事、但シ會合精進禁酒可爲候事

家法定式 五冊
吉凶定式 五冊

安永六丁酉年正月

都合拾冊也

附記 拙稿「明治維新と商家心得書」(拙著「明治維新」所收二七頁)に、板本「主従日用條目」の著者、善次郎事池田義信を何人であるか不明と記して置いたが、後になってそれが一筆庵主人、淡齊英泉であることに気がついた。同書に同人の著書「善悪名所圖會」の廣告が掲載されてゐるにも拘らず、あまりにかけ離れてゐたため気がつかかなかつたのである。

(昭和十七年三月十九日稿)

M・T・ウァメル著『古典賃銀學說の發展』

Wernel, Michael Theodore:—The Evolution of the Classical Wages Theory.
New York: Columbia University Press, 1939. Pp. xii, 190-\$ 2.25—

三邊 清一郎

本書は、二世紀に近い發展を辿つてリカアドオの生活賃銀説となり、更に後にラサールの所謂「賃銀鐵則」として社會運動の理論的根據となつた古典賃銀學說の生成と發展の批判史である。

著者はまづ十七世紀初頭のイギリス重商主義文献、殊にトマス・マンの著作にこの學說の萌芽を認める。彼は、勞働者は全く働くことを好まないから、飢餓でこれを強要する必要があるといふことが、ごく初期の著作家の議論の出發點となり、根據となつてゐることを指摘してゐる。(P. 3)。それから續いて五章に亘り、特にペティ、ロック等の重商論者、獨佛の諸家、カンティロン、フュジオクライトとその後繼者達、マルサス以前の人口論者の著作を尋ねる。第六章では古典的綜合としてスミス、マルサスを取扱ひ、そして第七章では終局的綜合としてリカアドオ及びラサールを論じてゐる。

相當頁を費してラサールを論ずることの最後の章は、本書の特徴をなすものではあるが、著者自身は彼れをあまり

高く買つてゐない。「リカードが『賃銀鐵則』の父であるとすれば、ラサールは正にその名付親である。」彼れはその名を與へ、その社會的、政治的意義を高揚したが、理論的にはなに物も加へなかつた。彼れはたゞリカードの説を繰返してゐるに過ぎない。唯一の獨創は、賃銀の安定要素として労働者「移動」の觀念を取り入れて、リカードの所説に、チュルゴのそれを附加へたことである。だから「彼れの經濟上の意見は調和と一致を缺いてゐる。その歴史的重要性は、リカードの賃銀論の普及化とその社會的、政治的推論にある。」といふのがその見解である。(p. 161-68)。

かくて彼れは全篇を要約して次ぎのやうに言つてゐる。――

一、眞剣な賃銀論は、まづ實際政策の形をとつて、第十七世紀後半のオランダ及びイギリス經濟文獻に現はれた。これ等の研究は、一般に賃銀を最低生活水準に引下げる要を強調した。主な論據は、(イ)、労働者の能率を擧げるには、彼等を飢えて威かさねばならない。(ロ)、低賃銀は生産低減の必要條件であつて、世界に於ける市場競争上自國産業に有利だ、といふにある。

二、ところがこれ等政策論は、政策意圖實現の方法に關する問題を提起し、賃銀の變動原因とその平均水準決定條件の研究を必要ならしめた。そして第十七世紀のイギリスの經濟學者等は、理論方面に眼を向け、二つの結論に達した。すなはち、(イ)、賃銀はいつも最低生活水準に向つてゐる。(ロ)、賃銀を決定するものは、労働への需要供給である、といふのである。

三、(イ)は正しい形では述べられてゐないけれども、ペティの寧ろ抽象的な理論的言説の根底を成してゐるものである。これを正しい命題に推し進めたのはロックである。彼は交換經濟の自由競争裡にあつて、ひとり賃銀のみ

が最低生活水準に向ふと考へ、この傾向を、勢力、依存の社會關係として説明した。(ロ)は老カルベッパ(一六二二年)にまで遡り得るのである。

四、労働人口の地域的移動狀態を觀察して、チャイルドはこれ等移民と賃銀水準の變動の關係を考へ、ボアギョルペールは、この思想を、賃銀の生活水準への強制が労働の需給を均衡ならしめるといふ考と結び付けた。そしてこの結合から、労働の供給は労働需要が決定する。労働者数は、いつも需要の大いさに順應する、といふ結論が導き出された。すなはちカンティロンの説くところである。この思想がケネー、チュルゴのフジオグラート等によつて發展され、こゝに初めて賃銀の「鐵則」が姿を現はした。彼等は、労働人口の移動を、賃銀の固定化、最低化の最も重要な要因と觀たのである。

五、がしかし、賃銀の客觀的固定最低限への不斷の傾向を、このやうにして理論的に強固に説明できないことが、フジオグラートの主張に對して一の反動を生んだ。これは固定的賃銀水準説を非とするコンデヤックの所論のみならず、賃銀最低化の經濟的根據擁護論を罷め、社會勢力の相互關係に眼を移したネッケルの諸著作にも覗はれるところである。ジョームズ・ステュアートの著作では、労働の「價值」とその正しい標準との問題に就いての舊い叙述への復歸が見られる。

六、ステュアートのこの方面への貢獻の實際的意義は、賃銀の「動的」問題の系統的叙述と、その分析にある。彼れは後の經濟學者が二層充分に發展させた二法則をうち樹てた。分配動態理論――これは後にリカードの發展さすところであつて、經濟的進展の途上では、名目賃銀が増進を見るといふにある――、及び産業は農業生産力を犠牲にして發達するといふ思想、すなはち後にフランツ・オッペンハイマアの賃銀論の根本思想となつたものがこれ

である。

七、アダム・スミスの時代まで、人口理論は、多かれ少かれ賃銀問題とは關係なく發展して來た。歴史的に人口理論發展の跡を顧みれば、明かに三段階に區分される。第一段階では、人口の大増殖は大きな不幸だと考へられた。第二期では、人口の大きさは、利用可能の食物供給と平行すると思惟された。そして最後の第三期には再轉して、人口は食物供給の利用可能量よりも速かに増進すると考へられるに至つた。この思想が自然的貧窮理論の發展に取り入れられて利用された。

八、アダム・スミスはその賃銀水準の研究を、これを決定するに社會的諸勢力の論から初め、この諸勢力は確定したものとして考へて、労働水準を決定する經濟的諸勢力の分析に進んだ。彼は初めて、労働の供給は労働需要の變化に順應する道程に於いて變化するといふ思想と、人口理論とを公式に纏め上げたひとである。これが止に第二期の學說、すなはち人口の大きさは利用可能の食物供給量と平行する、として記されるところである。かくて出生、死亡の人口論的作用が、労働人口の地域的移動説に代つた。そして賃銀への壓迫が苛酷の上もないものとなり、自然論的意義を獲得したのであつたが、しかしスミス自身はその賃銀論を、生活資料説として構成せず、需要供給説として説述した。

九、マルサスはその賃銀論を需要供給説として發展した。労働に對する需要は、「労働維持のため」の生活資料「基金」によつて決定される。この「基金」は一般「収入元本」の一部としてのみならず、また土地の沃度遞減法則によつて自然的に限定せられる量だと考へられる。労働の供給は人口の原理によつて定められる。人口理論に従へば、人口は利用可能の生活資料の蓄積よりも、速かに増殖する傾がある。マルサスは、賃銀は、だゞ露命を繋ぐだけの生

活資料の最少限に向ふ傾は免れない、とは主張してゐない。彼の人口法則をつぎ詰めてゆけば、こうした結論は避けられないのであるが、しかし彼はその理論を、労働の供給に對する「道德的抑制」の影響の可能性に適應させることを望んだから、こゝいつた陳述を避けたのである。

一〇、リカードの賃銀論は、アダム・スミスの稍々分散的な研究を一の統一ある公式に纏め上げた産物である。フキジオクラットの着想と考へ合せて賃銀「鐵則」の再現と思惟していい。ラサールはこの法則に名稱と政治的應用を與へたに過ぎない。(p. 169-72.)

シカゴ大學のフランク・K・ナイト Frank K. Knight 教授は本書を批評して、古典的生活賃銀説がもつ多義性を看過するものであるとしてゐる。生活水準なる觀念は、先づ生理的要求からする最低限と、慣習及び社會的標準から限定されるその二解釋を許す。そして著者もこの區別は認めてゐる。けれども古典諸著作のうちには猶ほ二つの異つた生活賃銀論が見出されるのである。一つは、賃銀は人口の原理の作用の結果、最低限に低落する傾があると論ずる、言はゞ「長期説」である。この方は古典諸文献中にも割合明白に述べられ、比較的一般に認められるところである。けれども雇傭者は労働者を擱んでゐるから、短期をとつても彼等は、労働者が生きてゆき、その仕事をすることに必要なだけの賃銀をしか支拂はないといふ思想は、それとは別なものである。この説は明白には諸文献中に述べられてゐないけれども、利潤は賃銀を支拂つた後に残る剩餘だとする古典的賃銀論中に、明かに認められるのだといふのである。

本書がかかる批評を許すことは確かである。殊に現代の資本主義社會の「賃銀鐵則」は、マルサスの人口論でなく、ナイト教授の前記第二説を基礎とするものとも、考へられるからである。けれどもコロンビア大學圖書館のセリグ

マン文庫の豊富な經濟學文獻を涉獵驅使して論述したといふ本書は、その方面に於いて吾々を教へるところが多し。たゞ著者は、學の紹介、解説に於いて甚だ親切であるに對して、積極的にその理論的結果を明かにするにいとよか及ばないものがある。本書はこの點に於いてなほ批評の餘地あるものと信ぜれる。また些細のことかも知れないが、テュルゴをフイジォクライトと見るのは何うであらうか。

因みに本書は、ブルックリン・カレッジに籍を置く著者がコロンビア大學卒業生指導聯合委員會 Joint Committee on Graduate Instruction に提出した哲學博士學位論文の一部である。

前 號

(第三十六卷 三月號)

目 次

- 大東亞政策の經濟的課題……………山 本 登
- ケインズ利子概論說……………千 種 義 人
- 關東漁業の搖籃期……………羽 原 又 吉
- 古版經濟書解題……………高 橋 誠 一 郎
- チャールズ・ダヴェナント著「千六百九十五年版『戰費調達の手段方法に關する』一試論」

購 一 部 金五拾錢 郵税金貳錢
 讀 半ヶ年分 金貳圓九拾錢 郵税金拾貳錢
 料 一ヶ年分 金五圓四拾錢 郵税金貳拾四錢

編輯及び事務に關する一切の用件は發行所へ
 營業に關する用件は發賣所へ
 原稿締切期日は發行前月十日

昭和十七年三月二十五日印刷
 昭和十七年四月一日發行

三 田 慶 應 義 塾 內
 禁 轉 載
 第 三 卷 第 六 十 三 號
 發 行 所 東 京 市 芝 區 三 田 慶 應 義 塾 內
 江 田 範 保
 東 京 市 赤 坂 區 新 町 五 〇 四 二
 金 子 鐵 五 郎
 東 京 市 赤 坂 區 新 町 五 〇 四 二
 金 子 活 版 所

發 行 所 東 京 市 芝 區 三 田 慶 應 義 塾 內
 理 財 學 會
 東 京 市 神 田 區 淡 路 町 二 〇 九
 日 本 出 版 配 給 株 式 會 社
 東 京 市 芝 區 三 田 二 〇 一
 慶 應 出 版 社
 發 賣 所 慶 應 出 版 社
 購 讀 申 込 は 慶 應 出 版 社 へ

電話三田(五)二七九二番
 振替東京一五八一八〇番